日本福祉大学 2024 年度　科研費獲得支援制度　研究報告

研究代表者　所属・職：健康科学部・准教授

氏　　名：毛利　志保

研究課題名：患者の治療環境向上のための精神科病棟における看護動線の最適化

研究の概要

本研究は、精神科病院における患者の療養環境を改善し、「治療・治癒」に適した看護動線を最適化することを目的としている。国立 S 病院を対象に、改修後の患者や看護師の行動データを観察し、シミュレーションによる動線最適化を検討した。設計意図と実際の動線変化が一致しない要因を分析し、改善案を提案する。研究には、既存データ（2016、2020、2022 年）と新規調査（2024 年）を活用し、看護師や患者の行動観察やヒアリングを実施する。本研究の独自性は、改修計画に直接関わった研究者が一貫して改善提案を行う点や、新たなシミュレーション手法を導入し、得られた知見が他の精神科病棟計画にも応用可能である点にある。本研究は精神科病棟の改善に寄与し、国際的な精神的・社会的状況向上の目標とも合致する。

達成状況・成果内容

今年度は、国立 S 病院を対象に、改修後における患者や看護師の行動の観察データから、精神科病棟入院患者の空間利用と他者との関わりについて、2 報の研究報告としてまとめた。

・その１　病棟改修前後における看護師の居場所と業務内容の変化

2016 年度から継続している精神科病棟の改修前（2016）、改修直後（2022）の既存の患者や看護師の行動データとの比較を行うことにより、2021 年に実施された機能的改修の効果について検証している。スタッフステーション（SS）の縮小化と見える化、サブリビングの設置、保護室のユニット化などを導入した結果、看護師の居場所が変化し、患者への身体的・情動的支援が増加したこと、共用空間の分散化や SS の開放化により患者の行動が多様化し、看護師と患者が関わる機会が増加したことを実証した。これらの改修は患者の社会性の向上に寄与する可能性を示しており、精神科病棟における設計の改善に向けた有益な知見を提供した。

・その２　共有空間における交流を促す設え

その１と同様、国立 S 病院（精神科）における患者と看護師の行動観察より、交流が生じやすい空間の特徴を明らかにした。交流の定義は会話に加え、レクリエーションや声掛けなどを含むが、SS 外部からの訴えは除外された。その結果、交流発生割合は病棟や調査日により異なり、SS 周辺で特に高いことが判明した。自立度の高い患者が滞在するサブリビングは交流が目的でないケースが多いと推察された。また、食堂では窓や柱近くで患者同士の交流が頻発し、看護師との交流は SS の視界内で多い傾向が確認された。これらの知見は交流を促進する空間設計に貢献するものである。

上記より、自立度により交流を訴求する患者、交流を避ける患者の存在が明確になった。今後実施していく看護動線データおよび最適化シミュレーションにおいては、上記を踏まえて進めていく。